

THE MUSEUM OF ART, KOCHI

KENBI LETTER

ケンビレター

no.111

2021. autumn



奥谷博〈ベランダのモンステラ〉1967年、神奈川県立近代美術館蔵

奥谷博 — 無窮へ

HIROSHI OKUTANI: Towards Infinity

2021(令和3)年11月3日[水・祝]



2022(令和4)年1月16日[日]

一貫して具象画を追求し、自画像、人物、静物、風景、世界遺産、仏像など幅広い画題に取り組んできた画家・奥谷博。本展では、初公開となる宿毛時代の習作群から、代表作や最新作までの約100点を一堂に展示し、奥谷の尽きせぬ芸術世界をご紹介します。

高知県立美術館
THE MUSEUM OF ART, KOCHI



中学三年生の時に写生した水彩画。宿毛市坂ノ下にある奥谷さんの生家の裏手から、宿毛市街地の方向を見て描いたものです。画面左上に見える大きな山が、地元の人から「こんびらさん」として親しまれる本条山。宿毛金毘羅宮があることからこの通称で呼ばれています。

〈宿毛眺望〉1949年、個人蔵



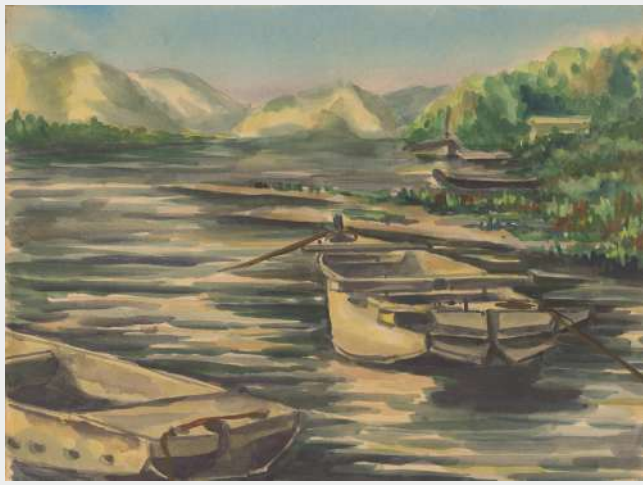
左:〈ツガニ〉1950年、個人蔵
右:〈蟹〉1949年、個人蔵

屋外写生に出ることができない雨の日は、自宅で静物画や自画像に取り組んだという奥谷さん。地元で採れた食材は、そんな奥谷さんにとって格好のモチーフでした。描いた後は勿論食べたのだとか。

Exhibition
Information
- 01

奥谷博一 無窮へ HIROSHI OKUTANI: Towards Infinity

11月3日から、当館では14年ぶりとなる画家・奥谷博さんの大規模回顧展「奥谷博一 無窮へ」を開催します。具象の画家として現在も精力的な活動を続ける奥谷さんは、1934年に高知県宿毛市で生まれました。太平洋に臨み、三方を山に囲まれた自然豊かな宿毛の町で育った奥谷さんの作品には、少年時代に身近に接していた海や魚といったモチーフが繰り返し登場することでも知られています。今回のケンビレターでは、本展で初公開となる、19歳ころまでに手掛けた「宿毛時代」の作品を中心にご紹介します。文・塚本麻莉(当館学芸員)



奥谷さんの生家前には、愛媛県宇和島市に源流を持つ松田川が流れています。昔は大きなスズキやコイが上がってくることもあり、それを橋の上から金突きで捕まえる人もいたそう。松田川を描いた作例は複数残っており、家の近所に出かけては写生に励んだ奥谷少年の姿が想像できます。なお、奥谷さんの屋外写生は生家周辺にとどまりません。宿毛市片島や宇須々木、遠いところでは生家からだと自転車を使っても片道4時間はかかる柏島(幡多郡大月町)など、少年ならではの体力と行動力で様々な場所に繰り出し、熱心に写生に取り組みました。

〈松田川の舟着場〉1950年、個人蔵

2021(令和3)年11月3日[水・祝] — 2022(令和4)年1月16日[日]

9:00 - 17:00 (入場は16:30まで) ※休館日: 12月27日(月) - 1月1日(土・祝)

観覧料 = 一般 1,200円(960円)、大学生 850円(680円)、高校生以下無料

※()内は20名以上の団体料金。※年間観覧券所持者は無料。

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳及び被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)、高知県及び高知市の長寿手帳所持者は無料。

主催 = 高知県立美術館、高知新聞社、RKC高知放送、朝日新聞社

後援 = 高知県教育委員会、高知市教育委員会、KCB高知ケーブルテレビ、エフエム高知 協力 = 日本芸術院



〈銀の鈴〉2019年、個人蔵

高知初公開の近作・新作もお見逃しなく

本展では宿毛時代の作品に始まり、前回2007年の個展から現在までの14年の間に描き上げた近作や最新作ももちろん出品します。近年の奥谷さんの作品には、自身の家族、とりわけ孫の「ちゃま」が頻出します。2019年制作の《銀の鈴》では、画面の右にその姿が認められます。いっぽう、本作の中央で迫力を放つのは、タイトル通りの「銀の鈴」。金工作家の宮田亮平氏が制作し、07年に東京駅構内に設置された、駅での待ち合わせのシンボルです。鮮烈な虹色に輝く大きな鈴と細やかに描きこまれた少女は、それぞれ描き方が異なっているので、ぜひ見比べてみてください。特に、点描が駆使された「ちゃま」の肌からは、独特の質感と生命力が感じられます。また、本作のもうひとつのポイントは、そのサイズ。奥谷さんの作品は大きいものが多く、本作も横幅は2mを超えています。向き合うと、まるで自分が絵の世界に包み込まれるような感覚すら覚えるでしょう。本展で、いまなお進化し続ける奥谷さんの世界をご堪能ください。

Exhibition Information - 02

「土佐もの」を蒐める楽しみ

今年の秋は、高知市内のある個人所蔵家のコレクションから、「土佐もの」を一室に並べてご紹介します。高知にゆかりのある画家たちによって描かれた作品は「土佐もの」と呼ばれ親しまれてきました。かつて高知では、1971年から2005年まで「古書画・古文書・稀観本鑑賞会」(以下、鑑賞会)という会が高知市民図書館を会場に催されていました。この会は数人の有志によって立ち上がり、各々の所蔵品を見せ合うことによる鑑賞眼の相互向上と郷土史の発掘を企図した勉強会としてスタートしました。月に一度催された本会は、やがて誰もが自身のコレクションを持ち寄ることができ、講師がぶっつけ本番のギャラリートークをしてくれるという、まさに「土佐もの」の良さをよりよく知って、広く楽しめる会に発展していきました。今回展示する作品は、この鑑賞会にも参加したことのある、ひとりの個人所蔵家が、その「土佐もの」ブームの熱気の中で集めたコレクションです。個人が自身の楽しみのために集め、大切に管理してきた作品群は、1点1点はこぶりながら、深い味わいがあります。山本昇雲が河田小龍に師事していた時代に名乗った「小斎」号の入った貴重な作品や、石井素堂、長屋秋香、小南香堂、渡辺千春といった、これまで当館には所蔵のなかった画家の作品も含まれていますので、この機会にぜひお楽しみいただけたら嬉しいです。文・中谷有里(当館学芸員)



山本昇雲〈黄石公と張良の図〉個人蔵

2021(令和3年)10月20日[水] - 12月19日[日]
1階第4展示室

9:00 - 17:00 (入場は16:30まで) 会期中無休

展覧会報告 ●7月24日(土) LIVE PAINTING「海を混ぜるⅢ」 ●8月1日(日) TALK SHOW「波を漕ぐⅢ」

ミロコマチコ展 関連企画報告



左から青葉さん、ミロコさん、harukaさん



撮影: Yayoi Arimoto

7月24日から9月20日に開催した企画展「ミロコマチコ いきものはわたしのかがみ」の関連イベントとして、初日閉館後の第4展示室ではLIVE PAINTING「海を混ぜるⅢ」、そして8月1日にはミロコさんと布作家・早川ユミさんによるTALK SHOW「波を漕ぐⅢ」を行いました。また、これまでのミロコさんとのご縁から県内のカフェやギャラリーではサテライト展示、オーテピア高知図書館や高知子どもの図書館、高知蔦谷書店、金高堂では特設コーナーが設置され、高知の皆さんの「ミロコ愛」を強く感じました。ミロコさんのライフワークであるライブ・ペインティングの出演者は、3人での共演は今回が初となるharuka nakamuraさん(ピアノ)と青葉市子さん(ギター、うた)。会場が展示室であることからミロコさんのリクエストで、初めてアクリル板を使用して、両面を行き来しながら、二つの異なる「いきもの」が描かれました。また、ミロコさんの衣装を制作するアーティストの大腦千加子さんが手掛けるMATOU PROJECTが始動し、初づくしのイベントとなりました。文・長山美緒(当館主任学芸員)

*9月5日に予定していたWORKSHOP「集まれ、いろいろな猫たち」は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、残念ながら中止となりました。

文化庁 大規模かつ質の高い 文化芸術活動を核としたアートキャラバン事業

当館では今年度、全国公立文化施設協会が受託した「文化庁 大規模かつ質の高い文化芸術活動を核としたアートキャラバン事業」に参画し、9月から来年1月にかけて高知県内で下記5事業を開催します。高知市文化振興事業団、四万十川国際音楽祭実行委員会、Washi+、高知演劇ネットワーク演会と共同主催し、当館、高知市文化プラザかるぼと、四万十市立文化センター、土佐市複合文化施設つな一で、蛸蔵を会場に開催します。

「トリオ・アコード」コンサート 四万十川国際音楽祭

- 日時＝2021年9月2日（木）19:00 ●会場＝四万十市立文化センター
 - 入場料＝一般／前売券2,000円、当日券2,500円 高校生以下／前売券・当日券とも500円
- 主催／高知県立美術館、公益社団法人全国公立文化施設協会 共催／四万十川国際音楽祭実行委員会、四万十市教育委員会



©T.Tairadate

2003年、東京藝術大学在学中の同級生3名により結成されたピアノ・トリオ。それぞれの海外留学を経て、近年公演を再開しました。古典から現代まで広いレパートリーを誇り、密度の濃い演奏で全国各地での演奏会にて好評を博しています。本公演ではソロ、デュオを含め5作品を演奏。トリオではベートーヴェンのピアノ三重奏曲 第7番「大公」と武満徹の「ピトゥーイン・タイズ」を演奏しました。※

【出演】白井圭（ヴァイオリン）、門脇大樹（チェロ）、津田裕也（ピアノ）
【演目】ベートーヴェン「ユダ・マカベウスの主題による変奏曲」（チェロ&ピアノ）、ショパン「幻想即興曲」「子犬のワルツ」（ピアノソロ）、イザイ「無伴奏ソナタ第3番」（ヴァイオリンソロ）、ベートーヴェン ピアノ三重奏曲 第7番「大公」、武満徹「ピトゥーイン・タイズ」（トリオ）

鈴木竜×棚川寛子「いとなむ」 Washi+Performing Arts? Project vol.6

- 日時＝2021年9月24日（金）19:30、25日（土）15:00 ●会場＝土佐市複合文化施設つな一で ブルーホール
 - 入場料＝一般／前売券2,000円、当日券2,500円 高校生以下／前売券1,000円、当日券1,500円
- 主催／高知県立美術館、Washi+、La forêt、公益社団法人全国公立文化施設協会 共催／土佐市教育委員会



写真：深田名江

コンテンポラリーダンス界で注目を集める振付家・ダンサーの鈴木竜と舞台音楽家として世界を舞台に活躍する棚川寛子が高知県の町を拠点に和紙の魅力を伝える舞台芸術プロジェクトを主導するWashi+とタッグを組み、「土佐和紙」をテーマにした新しい舞台芸術作品の創造に挑みます。※

蛸蔵ラボvol.8「STAND UP!」

- 日時＝2021年10月30日（土）18:00、31日（日）14:00 ●会場＝蛸蔵
 - 入場料＝一般／前売券2,000円、当日券2,500円 学生／前売券1,000円、当日券1,500円
- 主催／高知県立美術館、高知演劇ネットワーク演会、公益社団法人全国公立文化施設協会



写真：「Q学」（2020）

高知と関係が深く、関東・関西の一線で活躍する演劇人と、高知演劇ネットワーク演会が選抜した演劇人による一人芝居作品を全5組上演します。※

【上演5組】作・演出：田上豊（劇団田上バル／富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督）出演：村井まどか（青年団）／作・演出：松島寛和（劇団シアターホリック）出演：三上綾佳（TRY-ANGLE）／作・演出・出演：中内こもる／作・演出・出演：清水宏／作・出演：佐々木峻一（勢力クラブ）構成・演出：山下残

MUSEUM HALL INFO

声明の会・千年の聲 聲明コンサート「祈りの聲」

- 日時＝2021年11月3日（水・祝）18:00 ●会場＝美術館ホール
 - 入場料＝一般／前売券2,500円、当日券3,000円 学生（小学生～大学生）／前売券1,000円、当日券1,500円
- 主催／高知県立美術館、公益社団法人全国公立文化施設協会

お経に旋律がついた仏教音楽を「聲明」といいます。聲明に関する最も古い国内の記録は、752年の東大寺の大仏開眼供養会で、この法会では、唄、散華、梵音、錦杖の四曲からなる「四箇法要」という曲が上演されました。その後聲明は、天台宗と真言宗の二派を中心に各宗派で独自の発展をとげました。今回招聘する声明の会・千年の聲は、聲明を代表する二派の僧侶達が宗派を超えて結成したグループで、国内外で上演を行っています。本公演では、大仏開眼供養会でも上演された古典の「四箇法要」と、作曲家・宮内康乃氏が千年の聲のために作曲した「海霧讃歎」「海霧廻向」を上演します。「海霧讃歎」は、東日本大震災の津波で亡くなられた佐藤淳子氏が生前詠んだ短歌をもとに2012年に作曲され、被災地を含む日本各地で再演を繰り返してきた名作です。「海霧讃歎」の対になる新曲の「海霧廻向」とともに、祈りの聲をお客様に届けます。

この公演に先立って、事前講座を10月24日（日）に開催します。千年の聲の僧侶と宮内康乃氏をゲストに迎え、聲明の成り立ちや倍音と呼ばれる独特のハーモニーの魅力、天台宗と真言宗の曲の唱え方や博士と呼ばれる聲明の楽譜の違い、「海霧讃歎」「海霧廻向」の制作背景など、実演を交えてわかりやすくレクチャーします。講座・公演ともにどうぞお楽しみに。

文・折田彩（当館企画事業課主査）



photo: KENJI KAGAWA

Noism0 / Noism1「境界」「夏の名残のバラ」（同時上演）

- 日時＝2022年1月10日（月・祝）16:00 ●会場＝高知市文化プラザかるぼと 大ホール
 - 入場料＝一般／前売券3,000円、当日券3,500円 高校生以下／前売券1,500円、当日券2,000円
- 主催／高知県立美術館、公益財団法人高知市文化振興事業団、公益社団法人全国公立文化施設協会



「夏の名残のバラ」 photo: Kishin Shinoyama

新潟市民芸術文化会館りゅーとぴあを拠点に活動する日本初の公共劇場専属舞踊団Noismの創立メンバーであり、現在は副芸術監督も務める井関佐和子は高知県出身。芸術監督の金森穂の演出振付作品では常に主要パートを担い、その世界観を具現化する存在として高い評価を得てきました。2021年3月には令和2年度（第71回）芸術選奨文部科学大臣賞を受賞し、名実ともに日本を代表する舞踊家の一人として認められました。今回、金森とゲスト振付家の山田うんが「境界」をテーマに創作したダブルビル作品と、井関が芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した「夏の名残のバラ」の公演を行います。※

※ 文・浜口眞吾（当館企画事業課課長補佐）